

貝塚市内のため池の水生動物群集の現況および過去との比較

鈴木真裕¹・澤田智子²・天満和久²

はじめに

ため池は、主に農地の灌漑用水を確保するために人為的に造られた止水域であり、大阪府、兵庫県、広島県、山口県、香川県といった瀬戸内海沿岸は、全国的に見てもため池の数や分布密度が高い地域であることが知られている（浜島、2002）。大阪では 2022 年時点で 3900 以上のため池が分布しており、その大半が大和川以南の泉州地域に集中している（大阪府，“ため池データベース”，https://www.pref.osaka.lg.jp/ol20100/nosei_seibi/tokuteitameike/index.html, 2025 年 3 月閲覧）。ため池は多様な水生生物や半水生生物の生息場所として機能することが知られており（西城、2001；浜島ほか、2002）、泉州地域ではため池が水生生物の生息場所として重要な役割を担っていると思われる。自然遊学館は 2000～2002 年に貝塚市内のため池の水生動物調査を実施しており、ため池の環境と水生生物の生息状況を知ることができる（山田・岩崎、2002, 2003, 2004）。しかし、当時から現在までの 20 年以上の間に、景観の変化や侵略的外来種の侵入といったため池を取り巻く環境の変化が起こっていると想定され、水生動物群集も少なからず変化している可能性がある。本報では山田・岩崎（2002, 2003）により 2000～2001 年に調査が実施された市内の 3 ヶ所のため池について水生動物群集の再調査を実施し、過去の記録との比較を試みた。

調査地と方法

本報は貝塚市内にある牛神池、野井谷池、梶谷の池の 3 ヶ所を調査地とした（図 1、2）。各池の特徴は以下のとおりであった。

牛神池（貝塚市名越；34.4155° N, 135.3715° E）：水面面積約 1,200 m²、水深約 1 m、周囲の大半は広葉樹林に隣接しており、南側にはネビキグサ（アンペライ）*Machaerina rubiginosa* の草原が広がり、ネビキグサは開放水面付近のみ抽水植物、草原内では湿生植物として生育していた。

野井谷池（貝塚市蕎原；34.3717° N, 135.4251° E）：水面面積約 280 m²、水深> 1 m、周囲は低茎草本に覆われた堤と針葉樹林に隣接し、堤付近にはヒツジグサ *Nymphaea tetragona* が疎らに生育していた。

梶谷の池（貝塚市梶谷；34.3650° N, 135.3872° E）：水面面積約 40 m²、水深約 1 m、周囲は主に針葉樹林に隣接していた。堤の辺りが比較的開放的であったが、水面の半分以上は樹冠に覆われていた。堤の付近にはナガエミクリ *Sparganium japonicum* が生育していた。池の西側には穏やかな流水環境からなる流入部があった。

調査は 2023～2024 年の 6 月および 10～11 月に実施された。調査日程は牛神池では 2023 年 6 月 23 日、11 月 27 日；野井谷池では 2023 年 11 月 27 日、2024 年 6 月 22 日；梶谷の池では 2024 年 6 月 22 日、10 月 28 日であった。各池において、すくい採り調査、トラップ調査、目撃調査および水質調査を実施した。山田・岩崎（2002, 2003）でも実施されていたすくい採り・トラップ・水質調査は過去と同様の方法で実施したが、補記を含む詳細を以下に示す。

1 大阪公立大学大学院農学研究科 2 貝塚市立自然遊学館

すくい採り調査は、2 名（鈴木・澤田）で 60 分間、目合い約 2 mm、前幅 35 cm の D 型フレーム網を用いて水生動物を採集した。ただし、現地で同種または同分類群と判断できる個体が多く観られた場合は、概数をカウントして一部のみを採集した。採集後、種または分類群ごとの個体数を集計・記録した。ただし、個体数が 100 個体を超えた場合は 100 個体として記録した。現地で種同定が困難な動物および標本用の動物のみを持ち帰り、残りは現地にリリースした。持ち帰った動物は約 80%エタノール液浸標本として固定した。トラップ調査は、1 個のセルビン（直径 16 cm×長さ 24 cm）の中にサナギ粉を入れ、各池で約 30 分間水中に設置し、捕獲された種ごとの個体数を記録した。ただし、秬谷の池の 6 月調査時には水深が浅く、トラップを設置しなかった。目撃調査は、現地で調査中に水上と水辺で観られたトンボ類・両生類の種ごとに個体数を記録した。水質調査は、水辺から採取した水を用いてパックテストを行った。

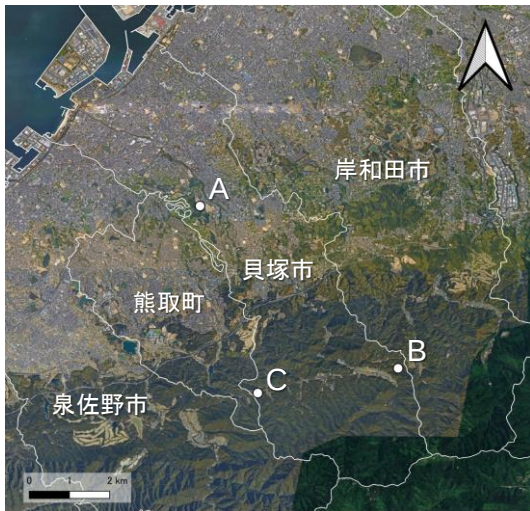


図 1. 調査したため池の位置

A : 牛神池, B : 野井谷池, C : 秬谷の池

地図は国土地理院の年度別空中写真（2021 年）を用いた。

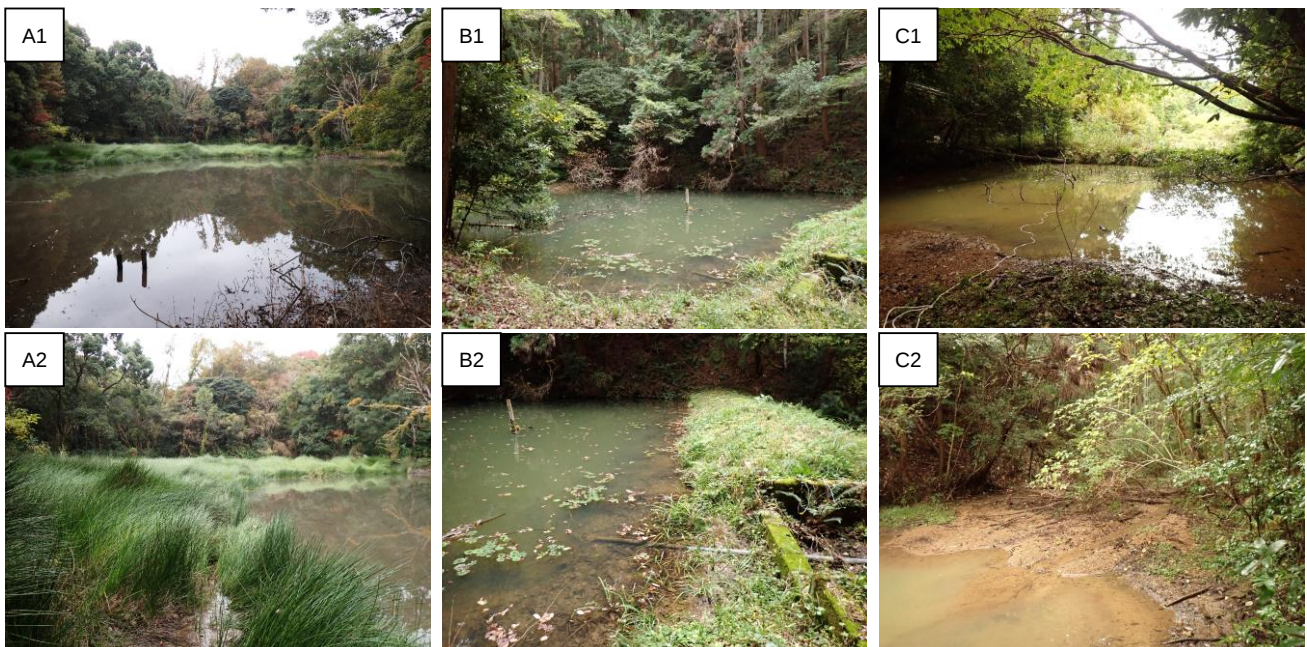


図 2. 調査地の景観

A1、A2 : 牛神池 ; B1、B2 : 野井谷池 ; C1、C2 : 秬谷の池

A2 はネビキグサ、B2 は堤、C2 は池への流入部の様子を示す。

結果と考察

1. 各調査で観られた水生動物群集

すくい採り調査の結果、3つのため池の総計で64種1,845個体の水生動物が確認された(表1)。池・時期別にみると、牛神池、野井谷池、柵谷の池のそれぞれで6月には20種459個体、26種207個体、27種517個体、10~11月には11種51個体、12種110個体、21種501個体が確認され、両時期において種数・個体数ともに柵谷の池でもっとも多かった。牛神池では両時期とも種数をもっとも少なく、10~11月には個体数をもっとも少なかった。種構成をみると、牛神池では6月にはハエ目の3種(ヌカカ亜科 sp.、エリユスリカ亜科 sp.、ユスリカ亜科 sp.)、イトミミズ亜科 sp. (各100個体) およびウシガエル(33個体) が優占し、10~11月にはウシガエルが最上位種(14個体) であり、両時期ともに他種の個体数は全て1桁レベルであった。一方、野井谷池、柵谷の池では両時期ともに2桁レベルの個体数で記録された種が比較的多く、上位種はハエ目やイトミミズ亜科 sp. に偏ってもいなかった。加えて、特定外来生物であるウシガエルと条件付き特定外来生物であるアメリカザリガニは、牛神池のみで確認された。大阪府レッドリスト 2014 (大阪府、<https://www.pref.osaka.lg.jp/0120030/midori/tayouseipartner/redlist.html>, 2025年3月閲覧) 掲載種については、牛神池でエサキアメンボ(絶滅危惧Ⅱ類) など2種が確認され、野井谷池、柵谷の池でそれぞれ4種(準絶滅危惧) が確認された。

トラップ調査の結果、牛神池で10~11月にウシガエル幼生1個体が確認されたが、それ以外の池・時期では全く捕獲されなかった。

目撃調査の結果、3つのため池の総計で15種57個体の水生動物(トンボ目、カエル目) が確認された(表2)。池・時期別にみると、牛神池、野井谷池、柵谷の池のそれぞれで6月には9種12個体、6種25個体、3種14個体、10~11月には1種2個体、1種3個体、1種1個体が確認された。比較的多くの動物が確認された6月で3つ池を比較すると、牛神池では種数はもっとも高かったが、個体数はもっとも低かった。種構成をみると、すくい採り調査において幼虫・幼生が確認されなかった種は牛神池でキイトンボなど5種(トンボ目のみ)、野井谷池でオオシオカラトンボなど3種、柵谷の池でウシガエルなど2種であった。ウシガエルは野井谷池、柵谷の池において目撃調査のみで確認された。大阪府レッドリスト 2014 掲載種については、野井谷池でトノサマガエル、柵谷の池でヤマアカガエルがそれぞれ目撃調査のみで確認された。

以上について調査地の3つのため池における水生動物群集の現況まとめると、すくい採り調査の結果から、牛神池ではもっとも種多様性が低い群集、柵谷の池ではもっとも種多様性が高い群集が成立していると考えられる。牛神池の種多様性の低さは特定外来生物であり個体数も多く観られた(トラップ調査でも唯一捕獲された) ウシガエルによる負の影響が強く働いていると推測される。このことは目撃調査の結果とも矛盾しないと思われる。目撃調査において牛神池ではもっとも種数が多かったものの、すくい採り調査で幼虫・幼体が確認されなかった種ももっとも多く、観られた種がトンボ目に限られていた。牛上池は3つのため池の中で唯一貝塚市内の平野部に位置し、周辺には種供給源となりうる池が高い密度で存在しているため、周辺からの移動分散・供給には恵まれている割に、繁殖している個体数は少ないと考えられる。加えて、トノサマガエルなどのカエル目が唯一確認されたなかったことも、ウシガエルによる負の影響を示唆している。

一方、特筆すべき記録として牛神池では絶滅危惧Ⅱ類のエサキアメンボが確認された。本種は大阪府において枚方市から1989年(枚方市、1990)、岸和田市から1988~1989年(岸和田市教育研

究所、1990）、大阪市内のワンド群から2017年以前（大阪市、<https://www.city.osaka.lg.jp/kankyo/page/0000067896.html>、2025年3月閲覧）に記録されているが、確認地点が少なく希少な記録といえる。ため池や河川の抽水植物群落内に生息するとされ（林・宮本、2005）、牛神池に繁茂しているネビキグサが本種の生息環境を形成しているようである。

表1. 貝塚市内のため池で2023～2024年に実施されたすくい取り調査で確認された水生動物種と個体数

個体数は概数の記録を含み、100個体を超えた場合は100個体として記録した（本文参照）

上位分類		目／下位分類	科	種	発育段階				10～11月			備考	
					6月		7月		8月		9月		
両生類	カエル目	アカガエル科	ウシガエル	幼生	33				14			特定外来生物	
		アオガエル科	シュレーゲルアオガエル	幼生		13	28					大阪府RL準絶滅危惧	
	サンショウウオ目	イモリ科	アカハライモリ	成体		1						大阪府RL準絶滅危惧	
甲殻類	ワラジムシ目	ミズムシ科	ミズムシ	-	3	30	10						
	エビ目	アメリカザリガニ科	アメリカザリガニ	-	3				7	7	15	条件付き特定外来生物	
		サワガニ科	サワガニ	-							1		
昆虫類	カゲロウ目	コカゲロウ科	フタバカゲロウ	幼虫		3							
		トビイロカゲロウ科	ウエストントビイロカゲロウ	幼虫				2					
	トンボ目	アオイトトンボ科	オオアオイトトンボ	幼虫			23	100					
		モノサシトンボ科	モノサシトンボ	幼虫			9	40				80	
		イトトンボ科	クロイトトンボ	幼虫	1	16	2						
		ヤンマ科	ミルンヤンマ	幼虫				1					
			ヤブヤンマ	幼虫				2		1	19		
			オオルリボシヤンマ	幼虫			4					大阪府RL準絶滅危惧	
			クロスジギンヤンマ	幼虫	1	3				3			
		サナエトンボ科	フタスジサナエ	幼虫				2				大阪府RL準絶滅危惧	
			オジロサナエ	幼虫				1					
		オニヤンマ科	オニヤンマ	幼虫				17				3	
	エノトンボ科	タカネトンボ	幼虫				8				5		
	トンボ科	シオカラトンボ	幼虫						5				
		オオシオカラトンボ	幼虫					7			23		
		リスアカネ	幼虫		2	1	8						
		コシアキトンボ	幼虫			1							
	カメムシ目	マツモムシ科	マツモムシ	成虫		14	18			20	29		
			コマツモムシ	成虫						61			
		アメンボ科	ハネナシアメンボ	成虫	1					6			
				幼虫	1					2			
			ヒメアメンボ	成虫	1								
			ヒメアメンボ属sp.	幼虫	1								
			エサキアメンボ	成虫	1							大阪府RL絶滅危惧Ⅱ類	
			コセアカアメンボ	成虫			50	50					
			ヤスマツアメンボ	成虫			1					4	
			オオアメンボ	成虫			20	3					
	シマアメンボ		成虫				2						
	カタビロアメンボ科		ホルバートケンシカタビロアメンボ	成虫	1								
		マダラケンシカタビロアメンボ	成虫					1					
	イトアメンボ科	オキナワイトアメンボ	成虫			4					17		
		ミズカメムシ科	ヘリグロミズカメムシ	成虫	1								
			マダラミズカメムシ	成虫			1	1		1	100		
		ミズムシ科	コミズムシ属sp.	成虫							1		
			センブリ科	センブリ属sp.	幼虫				5			100	
		チョウ目	ツトガ科	マダラミズメイガ	幼虫			1			4		
		コウチュウ目	ゲンゴロウ科	ウスイロシマゲンゴロウ	成虫					2		1	大阪府RL準絶滅危惧
				マメゲンゴロウ	成虫			2			2	1	
			ガムシ科	キベリヒラタガムシ	成虫	1					3		
				ヒメガムシ	成虫						4		
			マメガムシ	成虫			1						
	マルハナノミ科		トビイロマルハナノミ	幼虫	3								
			ナガハナノミ科	ヒゲナガハナノミ	幼虫			1			1	1	
	ハエ目		ハムシ科	ジュンサイハムシ	成虫						2		
			ヌカカ科	ヌカカ亜科sp.	幼虫	100							
			ユスリカ科	エリユスリカ亜科sp.	幼虫	100							
		モンユスリカ亜科sp.		幼虫				100				30	
			ユスリカ亜科sp.	幼虫	100								
			ユスリカ属sp.	幼虫		2	100				60		
			オオユスリカ	幼虫	3								
		ガガンボ科	ガガンボ属sp.	幼虫						1			
		カ科	ナミカ亜科sp.	幼虫			2						
		ナガラエブ科	ナガラエブ属sp.	幼虫				1					
	貝類	水棲類	サカマキガイ科	サカマキガイ	-	1		2	2	2		3	外来種
モノアラガイ科			ハブタエモノアラガイ	-		2			3	5	5	外来種	
			ヒメモノアラガイ	-				1					
ヒラマキガイ科			カワコザラ族sp.	-		1							
貧毛類	イトミミズ目	ミズミミズ科	エラミミズ	-	1		5		4	3			
			イトミミズ亜科sp.	-	100	1	1						
合計個体数					459	207	517	51	110	501			
種数					20	26	27	11	12	21			

表 2. 貝塚市内のため池で 2023～2024 年に実施された目撃調査で確認された水生動物種と個体数

網掛けの数値は同じ時期・池のすくい取り調査では確認されなかった種の個体数を示す

上位分類	目	科	種	発育段階	6月			10～11月			備考	
					牛神池	野井谷池	梶谷の池	牛神池	野井谷池	梶谷の池		
昆虫類	トンボ目	モノサシトンボ科	モノサシトンボ	成虫		5	10					
		イトトンボ科	キイトトンボ	成虫	1							
	クロイトトンボ		成虫	1	10							
	ヤンマ科	ギンヤンマ	成虫	1								
		クロスジギンヤンマ	成虫	2	1							
	トンボ科	ショウジョウトンボ	成虫	1								
		コシアキトンボ	成虫	1	1							
		チョウトンボ	成虫	3								
		シオカラトンボ	成虫	1								
		オオシオカラトンボ	成虫		3	3						
		モノサシトンボ	成虫	1								
両生類	カエル目	アカガエル科	ウシガエル	成体						1	特定外来生物	
			ウシガエル	幼体				2	3			特定外来生物
			トノサマガエル	成体		5						大阪府RL準絶滅危惧
			ヤマアカガエル	成体			1					大阪府RL絶滅危惧Ⅱ類
合計個体数					12	25	14	2	3	1		
種数					9	6	3	1	1	1		

表 3. 貝塚市内のため池で 2000～2001 年（山田・岩崎，2002，2003）および 2023～2024 年に実施された水質調査の結果

項目	牛神池				野井谷池				梶谷の池			
	2000年		2023年		2001年		2024年		2001年		2024年	
	6月	11月	6月	11月	6月	10月	6月	11月	6月	10月	6月	10月
亜硝酸 (mg/L)	<0.02	<0.02	-	<0.02	<0.02	<0.02	<0.005	<0.005	<0.02	<0.02	<0.005	<0.02
COD (mg/L)	20-50	50	-	20	10	10	5	10	10	5-10	5	5
pH	>6.2	>6.2	6.5	6.5	6.5	6.5	6.5	6.0	6.5-7.0	6.5	6.5	6.0
リン酸 (mg/L)	<0.2	<0.2	-	<0.2	0.5-1.0	0.5	<0.2	<0.2	0.5	<0.2	<0.2	0.1
アンモニウム (mg/L)	0.1-0.2	-	-	0.5	<0.1	<0.1	<0.2	0.2	0.1	<0.1	2.0	<0.2

2. 2000～2001 年の調査結果との比較

水質調査の結果について、山田・岩崎（2002、2003）との比較表を作成したが（表 3）、各計測項目に水生昆虫にとって重要と思われる変化はみられなかった。水生動物について、山田・岩崎（2002、2003）では水生昆虫の定量的な記録と、他の水生動物の確認種の記録が掲載されているため、本調査で観られた水生動物のうち水生昆虫に限り、2000～2001 年の調査結果との比較表を作成した（表 4）。

各池における群集の変化をみると、牛神池では種数、個体数とも大きく増加（10 種 43 個体から 17 種 343 個体）、野井谷池では種数が増加（16 種 253 個体から 23 種 253 個体）、梶谷の池では種数が同程度、個体数が大きく増加（28 種 190 個体から 26 種 944 個体）した。3 つのため池全体でみた記録消失種は 20 種、追加記録種は 27 種であった。これらの結果から、2000～2001 年よりも種多様性が増加傾向にあるように読める。2001 年に野井谷池ではギンズナとコイ、梶谷の池ではギンズナの記録があり、これらが消失または減少したことにより水生昆虫の種多様性が高まった可能性がある。しかし、牛神池では 2000 年にウシガエルの記録がないこと、追加記録種にはカタビロアメンボ科、イトアメンボ科、ミズカメムシ科の各種やヌカカ亜科 sp. といった見逃しやすい小型種や、ゲンゴロウ科、マルハナノミ科などの採集技術が確認の有無に影響しやすいであろう種が多く含まれること、過去の調査者がため池の動物の同定に不慣れである旨の記述があること（山田・岩崎、2002）を踏まえると、種数や個体数の増加には調査精度の違いによる影響が含まれる可能性がある。したがって、ここでは記録消失種に着目して考察を行う。

記録消失種をみると、フタスジモンカゲロウなどカゲロウ目 3 種、アサヒナカワトンボなどトンボ目 4 種、コバントビケラ属 sp. などトビケラ目 3 種が 2001 年に柵谷の池のみで確認された種であり、柵谷の池に特異的に観られた種の消失傾向が目立つ。これらの記録消失種の中でも特に注目すべきは、2001 年にギンヤンマ（7 個体）がユスリカ科 spp. に次いで多く確認されていることである。2001 年時点でも柵谷の池は樹冠に覆われた閉塞的な環境であったとされるが（山田・岩崎、2003）、本種は開放的な水域に生息する種であることから、本種の消失は過去よりもこの池がさらに閉塞化したことを示唆している。このことは、柵谷の池の記録消失種の潜在的な減少要因として挙げられる。加えて、カゲロウ目各種、ヨツメトビケラ、アサヒナカワトンボといった流水性昆虫も含まれることから、流入部でも何らかの環境変化が生じた可能性がある。前述のとおり柵谷の池は 3 つの池のなかで唯一、確認種数が過去と同程度（増加していない）ことから、樹冠被覆の拡大などの環境変化にともない種多様性が減少した可能性がある。

全ての記録消失種のなかでもっとも傾向が顕著であった種として、3 つの池すべてで消失したセスジイトトンボが挙げられる。本種は抽水植物や浮葉植物の豊富な環境を好むとされる（山本ほか、2009）。上久保（2001）は、本調査では観られなかった水生植物として牛神池でヒシ、オニビシ、野井谷池でナガエミクリ、フトヒルムシロ、ハリイ、柵谷の池でヒツジグサ、ミズユキノシタを記録しており、抽水植物や浮葉植物が減少した可能性が高い。このことは、セスジイトトンボを含む水生植物依存種の存続にとって重要な要因になりうるため、今後も注目しておくべき環境要素であろう。

引用文献

- 浜島繁隆（2002）ため池の概観。「ため池の自然－生きものたちと風景」，浜島繁隆・土山ふみ・近藤繁生・益田芳樹（編），pp. 25-29，信山社サイテック，東京。
- 浜島繁隆・土山ふみ・近藤繁生・益田芳樹（編）（2002）ため池の自然－生きものたちと風景．信山社サイテック，東京。
- 林 正美・宮本正一（2005）半翅類．日本産水生見虫 科・属・種への検索．川合禎次・谷田一三（編），pp. 291-378，東海大学出版会，神奈川。
- 枚方市（1990）枚方市自然環境調査報告書．枚方市，大阪。
- 岸和田市教育研究所（1990）岸和田市の溜め池自然環境調査．岸教研刊行集 848。
- 西城 洋（2001）島根県の水田と溜め池における水生昆虫の季節的消長と移動．日本生態学会誌 51：1-11。
- 山田浩二・岩崎 拓（2002）貝塚市内のため池の水生動物．貝塚の自然（4）：18-27。
- 山田浩二・岩崎 拓（2003）貝塚市内のため池の水生動物Ⅱ．貝塚の自然（5）：31-39。
- 山田浩二・岩崎 拓（2004）貝塚市内のため池の水生動物Ⅲ．貝塚の自然（6）：1-10。
- 山本哲央・新村捷介・宮崎俊行・西浦信明（2009）近畿のトンボ図鑑．いかだ社，東京。

表 4. 貝塚市内のため池で 2000～2001 年（山田・岩崎，2002，2003）および 2023～2024 年に実施されたすくい取り調査で確認された水生昆虫種と個体数

表中の個体数は、それぞれ 6 月と 10～11 月の 2 回の調査における合計を示した

目	科	種	発育段階	牛神池		野井谷池		梶谷の池		記録 消失種	追加 記録種	備考
				2000年	2023年	2001年	2023～ 2024年	2001年	2024年			
カゲロウ目	コカゲロウ科	フタバカゲロウ属 spp.*1	幼虫			1	3	1				
		コカゲロウ科 spp.	幼虫			5				●		
	ヒメカゲロウ科	ヒメカゲロウ sp.	幼虫					1		●		
	トビイロカゲロウ科	ウェストントビイロカゲロウ	幼虫						2		●	
トンボ目	トビエラカゲロウ属 sp.	トビエラカゲロウ属 sp.	幼虫					1		●		
		フタスジモンカゲロウ	幼虫					2		●		
	カワトンボ科	アサヒナカワトンボ*3	幼虫					2		●		
	アオイイトトンボ科	オオアオイイトトンボ	幼虫				23		100		●	
		アオイイトトンボ	幼虫					3		●		
	モノサシトンボ科	モノサシトンボ	幼虫			8	9	7	120			
	イトトンボ科	キイトトンボ	幼虫	2						●		大阪府 RL 準絶滅危惧
		アオモンイトトンボ	幼虫	2						●		
		セスジイトトンボ	幼虫	15		15		4		●		大阪府 RL 準絶滅危惧
		クロイトトンボ属 種群*2	幼虫		1	1	16		2			
	ヤンマ科	ミルンヤンマ	幼虫						1		●	
		ヤブヤンマ	幼虫			2	1	1	21			
		オオルリボシヤンマ	幼虫				4				●	大阪府 RL 準絶滅危惧
		ギンヤンマ	幼虫			1		7		●		
	サナエトンボ科	クロスジギンヤンマ	幼虫		1	5	6	2				
		フタスジサナエ	幼虫						2		●	大阪府 RL 準絶滅危惧 大阪府 RL 絶滅危惧 II 類
		オグマサナエ	幼虫					3		●		
		オジロサナエ	幼虫					2	1			
	オニヤンマ科	オニヤンマ	幼虫					7	20			
	エントンボ科	エントンボ科 種群*2	幼虫	5				1	13			
	トンボ科	シオカラトンボ	幼虫		5						●	
		オオシオカラトンボ	幼虫						30		●	
		ショウジョウトンボ	幼虫	2						●		
		リスアカネ	幼虫		2		1	1	8			
カメムシ目	マツモムシ科	アカネ属 sp.	幼虫					1		●		
		コシアキトンボ	幼虫				1	7				
		チョウトンボ	幼虫	1						●		
		マツモムシ	成虫			5	34	6	47			
	タイコウチ科	ヒメミズカマキリ	成虫	1						●		大阪府 RL 準絶滅危惧
		ハネナシアメンボ	成虫	3	7							
		ヒメアメンボ	成虫		3			3				
		エサキアメンボ	成虫		1	3					●	大阪府 RL 絶滅危惧 II 類
	アメンボ科	コセアカアメンボ	成虫				50		50		●	
		ヤスマツアメンボ	成虫				1		4		●	大阪府 RL 準絶滅危惧
		オオアメンボ	成虫			4	20	1	3			
		ナミアメンボ	成虫			4				●		
	カタビロアメンボ科	アメンボ科 spp.*1	幼虫	1	1	4		6				
		シマアメンボ	成虫					2	2			
		ホルバートケンカタビロアメンボ	成虫		1						●	
		マダラケンカタビロアメンボ	成虫		1						●	
	イトアメンボ科	オキナワイトアメンボ	成虫				4		17		●	
	ミズカメムシ科	ヘリグロミズカメムシ	成虫		1						●	
		マダラミズカメムシ	成虫				2		101		●	
		コミズムシ属 sp.	成虫						1		●	
		センブリ属 sp.	幼虫					3	105			
ヘビトンボ目	ツトガ科	マダラミズメイガ	幼虫				5				●	
チョウ目	アシエダトビケラ科	コバントビケラ属 sp.	幼虫					3		●		
トビケラ目	マルバネトビケラ科	マルバネトビケラ科 sp.	幼虫					1		●		
	フトヒゲトビケラ科	ヨツメトビケラ	幼虫					1		●		
	ゲンゴロウ科	ウスイロシマゲンゴロウ	成虫		2				1		●	大阪府 RL 準絶滅危惧
		マメゲンゴロウ	成虫				4		1		●	
コウチュウ目	ガムシ科	キベリヒラタガムシ	成虫		4						●	
		ヒメガムシ	成虫		4	4					●	
		マメガムシ	成虫				1				●	
		オオミズスマシ	成虫			12				●		大阪府 RL 絶滅危惧 II 類
	マルハナノミ科	トビイロマルハナノミ	幼虫		3						●	
	ナガハナノミ科	ヒゲナガハナノミ	幼虫				2		1		●	
	ハムシ科	ジュンサイハムシ	成虫		2						●	
	ヌカカ科	ヌスカカ亜科 sp.	幼虫		100						●	
	ユスリカ科	ユスリカ科 spp.*1	幼虫	2	203	174	2	109	290			
	ガガンボ科	ガガンボ科 種群*2	幼虫				1	1				
ハエ目	カ科	ナミカ亜科 sp.	幼虫				2				●	
	ナガレアブ科	ナガレアブ属 sp.	幼虫						1		●	
合計個体数				43	343	253	253	190	944			
分類群数*4				10	17	16	23	28	26	20	27	

*1 本報では種別に記録したが、山田・岩崎 (2002, 2003) では複数種の統合群 (spp.) として記録されているため、整合させるために統合群として表記した。

*2 山田・岩崎 (2002, 2003) と本報で記録された分類群のうち、同種かどうか判断ができない分類群を種群として表記した。

*3 山田・岩崎 (2002, 2003) で旧名のニシカワトンボとして表記されている種

*4 アメンボ科 spp. (幼虫) は、同科の成虫が各池・調査年で記録されているため、重複可能性を避けるために計数から除外した。